

辺野古新基地建設工事強硬に抗議する県民集会

～We shall overcome～

2015,2,22

崎山正美



抗議団の背後はキャンプ・シュワブ。砂漠仕様の車両が並ぶ（2015.2.22）

旧正月が明けて、今日は「止めよう辺野古新基地建設！国の横暴・工事強行に抗議する県民集会」が辺野古のキャンプ・シュワブ第一ゲート前で開かれた。次々と政府が強硬姿勢に打って来るのに危機感を持った県民集会であった。沖縄本島の北から南まで、そして宮古島からも有志が駆けつけてきた。事務局の発表によると約 3,000 人が集結したという。

午前中に平和運動センターの山城博治議長ともう一人が米軍のMPに拘束されたとのニュースが入った。状況は山城議長が抗議団に対しマイクで呼びかけをしている時、彼の足がわずかに米軍用地に入ったという。それを見た基地の警備員が彼を基地内に引きずり込んで逮捕したというのがその後の新聞報道であった。それには伏線があった。かねてから反対運動に対しいろいろと妨害活動をしている名護市議会議員がいてこの人が基地の中からもいろいろと干渉するもの、彼に対して米軍は逮捕するどころか匿うようなことをして、反対派の人たちの怒りが爆発寸前まで来ていたという。それに対し山城議長は、冷静になるよう仲間たちに呼びかけていたという。

糸満から辺野古にバスで向かう途中、隣席に座った年配の女性と少しだけ話をした。彼女の家族は戦前、南洋のテニアンに渡りサトウキビ栽培に勤しんでいたという。彼女は終戦で引き揚げた年に生まれたので戦争の記憶はないが、姉から聞いたという話を聞かせてくれた。島に上陸した米軍に追い詰められ日本軍は玉砕し、住民は今日スーサイド・クリフと呼ばれる断崖から次々と身を投げた。その様子は米軍の記録映像で見たことがあるが、彼女から聞いた話をもっと凄まじかった。狭い断崖の上で住民は飛び込むために列をなし順番待っていたという。彼女の家族がやっと飛び込む位置に付いたときに 10 歳の姉が崖下を覗いて、岩に打ち付けられて息絶えた者、波に洗われて溺れもがいている者などと地獄

を見てしまった。おびえた姉は父親の足にしがみつ「怖い、死ぬのは怖い」と泣きじゃくったという。そのおかげで彼女の一家は飛び降りる思いとどまりしばらくして米軍の捕虜になったという。それでも兄弟姉妹2名を失ったという。彼女は、戦争は二度と嫌だという。このバスに乗り合わせた方々の大半は政治活動家ではない。シンパでもない。辺野古の問題に対し政府の高圧的な態度に危機感を持った者たちの自発的参加である。年齢層は高いが壮年の人たちもいた。

集会が始まった。国会議員や名護市長などの挨拶があった。最も関心を惹きつけたのは高校生の挨拶であった。「先ほど山城さんが逮捕されたが罪を犯している米兵を何故逮捕しないのか」との素朴な疑問に参加者から拍手が沸いた。辺野古問題に対し県民が怒りに燃えているのは、新しい基地を作らせない、沖縄の美しい自然環境を戦争の為に破壊させないという強い意志とともに、キャンプ・シュワブ基地から少し南のほうに行ったところで起こった少女暴行事件への怒りである。それを本土政府や、多くの国会議員たちはすっかりお忘れになっている。これでは昔話に出てくる「生贄」のようなものだ。その代りお金はたんまりあげようとの論理である。私たちには人間の血が流れているのだ！誰がそんな取引が出来ようか。仮に本土政府が法的手続きは行われていると言おうが「生贄は決して提供しない」というのが私たちの強い意志である。

現場に立って少し気の毒に思う場面があった。ゲート前には若い警察官が垣を作るかのように並んでいる。いかめしさはなくまだ少年の風貌を宿している。そこに延々と抗議をする人がいた。抗議する気持ちも良く分かるものの、彼らの仕事は上からの命令に従わざるを得ない立場。彼らは答えることもなく宙を見つめている。若い警察官個人の心の内はさぞやつらかろう。平成生まれの彼らは戦争どころか復帰闘争も知らない世代である。

集会参加者の年齢層はかなり高い。したがって復帰闘争時のように学生がヘルメットかぶって基地に突入するようなことはない。いたって平和な抗議集会である。警察官も乱闘服ではなく平服である。ただし基地内に完全装備の機動隊が待機している可能性は否定できないところではあるが。

基地のフェンスに **We shall overcome** の歌詞が張り付けられていた。学生の頃には良く歌った歌である。この歌はジョン・バエズが歌って爆発的に世界中を駆け巡った歌である。アメリカの公民権運動、ベトナム反戦運動の時にも大合唱された。



歌詞はこうであった。

We shall overcome	私たちは乗り越えなければならない
We shall overcome	私たちは乗り越えなければならない
We shall overcome someday	私たちは乗り越えなければならない いつの日にか
Oh deep in my heart	おお、心深く
I do believe	私は信じる
We shall overcome someday	私たちは乗り越えなければならない いつの日にか
We shall hand in hand	私たちは手を取り合わねばならない
We shall hand in hand	私たちは手を取り合わねばならない
We shall hand in hand someday	私たちは手を取り合わねばならない いつの日にか
We shall all be free	私たちは皆自由になる
We shall all be free	私たちは皆自由になる
We shall all be free someday	私たちは皆自由になる いつの日にか
We are not afraid	私たちは恐れない
We are not afraid	私たちは恐れない
We are not afraid today	私たちは恐れない 今日の日
We are not alone	私たちは独りではない
We are not alone	私たちは独りではない
We are not alone today	私たちは独りではない
The whole wide world around	この広い世界を廻る
The whole wide world around	この広い世界を廻る
The whole wide world around some day	この広い世界を廻る いつの日にか
We shall overcome	私たちは乗り越えなければならない
We shall overcome	私たちは乗り越えなければならない
We shall overcome someday	私たちは乗り越えなければならない いつの日にか
Oh deep in my heart	おお、心深く
I do believe	私は信じる
We shall overcome someday	私たちは乗り越えなければならない いつの日にか

アメリカの公民権運動ではアメリカ政府の大半の政治家も賛成であったはずだ。いろんな困難を乗り越えてアメリカは民主主義国家として一つ階段を上ったはずだ。そうであるならばアメリカの政治家と国民は沖縄の主張を理解できるはずだ。そう信じたい。

沖縄の基地問題は、住民が望まない基地への反対であり、軍事力の否定でもあるが、日米地位協定に対する日本国民の権利の侵害に対する抗議でもある。さらに日本の中でも犠牲を強いられることへの抵抗でもある。かつてアメリカでこの歌を歌った人々、そしてオバマ大統領にはその歌の心がわかるはずである。私たちはもう一度この歌を歌いたい。キャンプ・シュワブにいる兵士たちに伝えたい。そして、この歌を歌ったことの無い若い警察官や海上保安庁の職員にもその意味を伝えたい。強いものが決めたことがすべてではないことを。真の民主主義の為に。私たちの闘いは決して力に訴えず、粘り強く心を伝えていかねばならない。

We shall overcome someday.



栄町商店街の人も駆けつけた



この黄色い線が基地の内外を示す



米軍車両がこれ見よがしに基地内に入って行く



か弱いこぶしだけど意志は固い